



一般社団法人 日本LD学会

会 報 第 76 号

Japan Academy of Learning Disabilities

【事務局】 〒320-0043 宇都宮市桜 3-1-6 吉田ビル 2F
TEL.028-666-0533 <http://www.soc.nii.ac.jp/jald/>

主な記事

<特集>

- ・日本版 WISC-IVについて
- ・青年期・成人期における支援
～就労における支援～

○特別支援教育と公開研修会（新潟）報告

<TOPICS>

- ・2011 年度の予定



キミの言葉を聴きたい

北海道大学大学院教育学研究院

田 中 康 雄

僕は、子どもの生きづらさ、親たちの育てにくさ、専門家の関わりにくさに関して、一緒に考えて事態の変更を検討し続ける仕事をしています。

ここ数年、僕が関わってきた子どもたちも相応に育っていき、立派な高校生や社会人へと巣立っていきました。そうした成長を見つづけ、関わり合っていく中で気がついたのは、かれらは「発達」をし続ける、ということでした。

子どもたちの発達状況には、凸凹というか、強いアンバランスさ、ズレがある、それは認めます。しかし、そのズレは、周囲がそれを問題視することで初めて明らかになるのです。個々に約束された道筋を精一杯に、一緒に生きているなかで、ズレは相互に気づかれ、明確化されます。幼児期は周囲の方が気づき、小学3年生前後から徐々に本人もうまくいかないズレに「悩み」はじめます。

家族は周囲と同じように生活を営めないことに、関係者は生活の技術を順調に獲得しにくいことに、悩めます。本人は、なにかおかしいということに悩めます。つまり、周囲はよりよい方向へ近づかせようとしますが、本人は違いに戸惑い立

ちずくんでいます。本人が欲しいのは「こうしてみよう」という周囲からの助言だけではなく、まずは「それで（きみで）良い」という肯定感なのです。

正しい行為を学ぶ前に、「ボクは存在してよい」という絶対的肯定感が必要です。いや、その前に必要なことがあります。それは、ここは大丈夫だよという環境の安全性です。世界が危険に満ちた場所ではないことを、僕たちは子どもたちに示し続ける責任があります。

最近よく関係者や保護者の方々から、「この子にどう関わればよいか」と尋ねられますが、そのまえに、その子はどう思い、なにを考えているのか尋ねてみませんか、と答えるようにしています。間違いのない関わりかたを準備したい、とわれわれが安心したい以上に、相手はもっと不安なはず。しかも僕たちと相手の思いには、おそらくズレがあるのです。本人に尋ね一緒に悩むことを抜きに、関わりの方策は見つかりません。

キミの言葉を聴きたい。関係はそこからです。